

第三章

關係古文献

一、旧藩日記（寺社御神事日誌中）

旧藩日記、寺社御神事日誌の中に次の文書があり

天保六年十二月二十三日

法華寺

天保三年住職寺務相勤め罷り在り候に付、冥加として小鷹殺生場邊りへ自分の物入を以て、供養碑を相建て申し度き旨申出、其筋吟味の上願の通り、寺社奉行へこれを申し渡す。

日誠上人また、先師の遺命に則り、専ら門弟の養成に力む。其の徳風を慕ひ、門下に列するもの実に十八人の多きに達せり。浅草慶印寺を董督したる、阿部日雅上人と當山二十世日海上人とは、その門下の雙壁と称せらる。

天保十三年日顕上人は、第十九世の法燈を相續せり。本山妙満寺百九十一世貫主權少僧都日誘上人の門下にして、稀に觀る碩学の師たり、学和漢に通じ宮谷檀林玄講二百十世の能化たり。當山を督するや、藩士の子弟に經学を講じ、令名城下に高かりしと云う。通義日鑑師と親交あり。又、其著作に「拾文私擬」と題するものあり。宗門緊要の書なりしが、可惜今散逸して所在明かならず、搜索中に属せり。大方若し誤て藏本せらるる仁あらば、冀くば返送を希求して息まず。

予、曾て巻頭数葉写し置たるを掲げて内容の一斑を示す。

董督とうとく || とりしまる。

雙壁そうへき || 相ならんですぐれた人物。

顯けん || つゝしみ深くおごそかなさま。

能化のうか || よく教化する。師の僧。

令名れいめい || よい評判。りっぱな名。

拾文私擬敘

夫

鳳山乘師著述之引導者

本迹二門之幽旨如來秘

藏之骨目而久遠初成塔

中遺付之要法也倩案中

乘師之學德深遠博大而

通二典著述頗多矣然以

此一鈔足略察師粵余

師宿昔追念

乘師之碩德集寫其諸文

而爲之據又輯錄衆說而

爲之解終積成一篇自號

拾文私擬欲以供

誘師之神靈繕修白業追

薦冥福焉余一日得餘力

請

師閱此書實開佛知見到

清涼地之目足也於是余

不堪賞歎不愧其詞鄙俚
粗記其意於篇端而已

嘉永^{壬子}姑洗

推恕軒 貫一拜 撰

兼呈

義見學兄

泰如學兄

先師乘尊所著述之引導予嘗傳得之而點示於
亡靈年已久矣雖然予性愚陋不能知其之所由
出憂之亦有年焉頃以讀經暇隙爲將來修因
閱天台三大部幸而往々得似同文且乘尊之註
解而頗得窺其意矣於是恐忘失不顧漆桶掃箒
之嘲粗拔抄一二記之名拾文私擬予曩有過行
爲

慈師袂罪責焉以故微行遙到此地然後不幾門
師遷化更雖不堪悔恨流水何還徒濕袖千今十
年嗚呼吾子等冀垂憐爲予請
師靈使免舊罪而不絕師弟契則三拜於

墓前謝舊過且供此小冊焉若得爲來世佛因資
糧之一助是大幸也已又敢勿使他見焉

嘉永五^{壬子}晚春

奥州南部盛岡

上行山十九更 妙解院 頓首

苦道卽法身 煩惱卽般若 結業卽解脫
如來壽量品曰如來如實知見三界之相至
錯謬矣

夫以一法界大秘藏覺躰本有常然普
備諸法諸法法爾而無始不阪也諸法
圓滿常樂我淨故云性德卽是衆生本

法重一切衆生無始己來迷此覺躰於
融性法自見染碍故妙玄第一舉妄見
曰若三界人見三界爲異二乘人見三
界爲如菩薩見三界亦如亦異也佛見
三界非如非異雙照如異也矣今此四
重中除佛見外悉是妄見皆流轉生死

成因果大聖世尊憐愍此迷施權誘機
顯實會道故文句第九日近情但見現
在八十過去無央未來不滅不知故約
三世開權顯遠矣既佛性從緣生豈外
緣不薰發性耶既是故說一乘一乘者
密佛地指境智用也既一念信解不信
則豐成緣耶久遠所成本來衆生覺體
其理體一故極果境智信本性開發忽
修顯妙體故記七曰一切衆生道前信
地何嘗能生性也而不成即極果道
後智地借生成之云尚有賴蓮祖大
士曰妙名口唱人煩惱業苦三道卽法
身般若解脫轉三德三諦三觀一心顯
其所住處常寂光土也能居所居身
土色心俱體俱用無作三身本門當體
蓮華佛者日蓮弟子檀那等父母所生
肉身全是也判給今以此等文理新歸
圓寂法號靈位點示者也

以上

藩治三百年、時に隆替ありと雖も、累世能く法城を嚴護し、王政維新の時に逮べり。是時に當り、英僧日海上人、衆望により擢んでられて二十世の法燈を相続し、明治元年晋山せり。

百度革新就中廢佛毀釈、教界の動搖甚だしきに際し、之が鎮定に銳意力を致せり、官上人を遇するに権少講議を以てし、次いで中教院會計課長に任じ、又、岩手縣下派内教導取締を申付らる。

當時上人の教界に重きを爲したる、以て想見すべし、化を遠近に布き或は遠野町に教会堂を建立し、和賀郡下に開教しては後に実成寺創建の端を開き、明治二十三年本堂の再建を企て、同二十四年六月二十六日を以て之を竣成し大に偉觀を整いたり。

明治二十六年四月には、信徒數名を隨いて会津本山妙法寺に詣して、開祖御遠忌奉修に列し、同年夏大僧正日暲猊下を屈請して、本堂再建の供養を兼ね開祖遠忌を虔修したり。今成乾隨 野口義禪師等來り会したり。

日暲上人即吟あり

「平生化益満山門 更築新堂報佛恩 堪賞寺檀無二信 皆歸妙法大根元」

明治三十二年四月老軀を提て、京都本山登詣を企て、信徒金田新兵衛、中村謙藏、佐々木倉松、田中守氏等之に隨う。その徳風感化新たに檀信徒に歸入したるもの、実に數十の多きに達せり。今日、盛岡の地、顕本の宗風、嶄然頭角を著すもの上人の化益に負ところ甚大なり。

吾人の上人を以て、上行山中興の開山と仰ぐ洵に所以あるなり。

門弟又渺からず。法嗣日研上人の外伊保内教精師は、東京品川清光院に住し、伊保内教守師は、千葉県南今泉本泰寺に、末弟伊保内教明師は大川村妙法院に在り。各各師命を体して現に活躍しつゝあり。

左に日堂猊下の歎徳文並に追悼文を掲げて、上人行化の一斑を知るの料に供す。

想見||想像する。思いやる。

追想。|| 化||教化

虔修||つゝしみおさめる。

化益||教化して益さしむる。

嶄然||山が高くそびえ立つさま。多くの中でひときわ目立ってすぐれている。